

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 5 年 6 月 12 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2022

課題番号：16K04341

研究課題名(和文) 日本に適合したカウンセリング訓練ツールの開発に関する基礎研究

研究課題名(英文) Fundamental research on the development of a counselor training tool adapted to Japan

研究代表者

藤生 英行 (Fujiu, Hideyuki)

筑波大学・人間系・教授

研究者番号：40251003

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：過去に収集した逐語録を倫理事項を配慮し電子化し再分析した。カウンセラーのスキルとカウンセラーの意図との関係、カウンセラーのスキルとクライアントの反応との関係、カウンセラーのスキルについてのクライアントの有益性評価の差異について、それぞれ明らかにして各学会で公表した。また、海外の知見と日本においても同様の結果が得られることも実証できた。さらに訓練により各スキルの有益性得点がプレテストに比較しポストテストでは上昇し訓練が効果があることも実証した。カウンセリング訓練で障壁であった逐語録作成と評価手続きを改善し、サーバに録画録音し、AI逐語化し、PCで評価できるツールを開発した。特許対応が必要である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究により、日本でのカウンセリングにおける関連変数の関係が明らかになった。カウンセラーから出された各スキル(是認と保証、開かれた質問、言い換え、感情の反映ほか)についてクライアントの有益性評価との関連、カウンセラーのスキルと意図との関係、カウンセラーのスキルとクライアントの反応との関係、および訓練前後でクライアントの有益性得点が増加し訓練に効果があることを実証した。また、カウンセリング訓練には、これまで一種の職人技が必須であった。PCを用いた自動逐語録化、すべての評価をプルダウンで選択できるUI利用で、訓練を簡易化できるツールを開発した。そのツールを用いれば訓練が容易になることが期待される。

研究成果の概要(英文)：In consideration of ethical matters, past verbatim data was digitized and re-analyzed. I conducted the following analyzes and presented them at conferences: the relationship between counselor skills and counselor intentions, the relationship between counselor skills and client responses, and the differences in clients' usefulness ratings of counselor skills. Through these, I was able to demonstrate that similar results can be obtained in Japan as well as overseas findings. I also demonstrated that counseling training increased usefulness scores for each skill post-test compared to pre-test. I improved the verbatim recording and assessment procedures, which had been a barrier in counseling training. I recorded the situation of the counselor and the client on the server, verbatim using AI, and made it possible to select the category on the PC.

研究分野：臨床心理学 カウンセリング心理学

キーワード：カウンセリング 訓練ツールの開発 逐語録 カウンセラーのスキル カウンセラーの意図 クライアントの反応 有益性評価

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

### 1. 研究開始当初の背景

(1) 日本において標準化できるカウンセリング訓練法、およびカウンセリング訓練の効果計測に使用できる訓練ツールが普及していない。そのため、日本の環境に適合した訓練方法について基礎研究を行う必要がある。

(2) その際、申請者が訳出し公刊した Hill (2004) の訓練方法をひな形として、それを日本文化に適合した形態で発展させることが考えられた。申請者は、10 年以上にわたって大学生、大学院生を対象に、上記訓練方法を実践してきた。そのような中で、訓練方法の向上に資することおよび個人情報の守秘を条件に、レポート提出を求めてきた。研究倫理委員会での審査を受けた上で、上記レポートの再解析により問題点を整理し、新たな分析枠を導入することができるのではないかと考えた。

### 2. 研究の目的

(1) カウンセリング訓練法に関する文献的検討を行い、ヘルピング(カウンセリング)訓練方法に関する研究を概観する。

(2) Hill (2004) の訓練方法を導入するにあたり複数の問題点が存在する。過去の提出レポートを再分析することで、Hill が訓練に用いたさまざまな評定に必要な項目(ヘルピング・スキル・システム、ヘルパーの意図、クライアントの反応、有益性)等が日本でも適用可能かを明らかにする。

(3) ヘルパーの各スキルが米国と同様なクライアントの反応を引き起こすかどうかを検証する。

(4) 現状では訓練手続きが手作業による逐語録作成、ヘルパーとクライアント両者からの評定等が求められる。繁雑であり学生のなかには戸惑う者もいるので、簡潔な手続きの開発が求められる。

### 3. 研究の方法

(1) APA のデータベース PsycNET を用いて文献検索し、関連文献を収集して文献的検討を行う。また、海外での情報収集を行う。

(2) 筑波大学人間系研究倫理委員会東京地区委員会での承認を得て、過去に提出されたレポートの再分析を行う。そのためには、分析用逐語録データ資料の電子化が必要である。また、過去の逐語録について評定が正しいかどうかについて、公認心理師・臨床心理士等の資格を持ちスクールカウンセラー経験 14 年以上あり、大学での相談業務でも経験豊富な者を雇用して、カウンセラーの言葉かけの分類、およびクライアントの陳述反応の分析を行う。

(3) 上記(2)の資料の電子化と分析結果を受けて、日本におけるスキルとクライアントの反応との関係、およびカウンセリングに関わる各変数間の関係を検討する。

(4) Linux 系の OS を採用し、マイクモジュール、音声解析ソフトなどを組み込んだ逐語録作成システムを作成し簡便化を行う。

### 4. 研究成果

(1) まず Hill らの研究を中心に 31 件収集した。それに加えアメリカ心理学会データベース PsycNET (日本語の主要論文も含まれる) を用いて {{counsel or skill} or {Counseling skill}} and {{client reaction} or {client statement}} などの検索語で 6 件、 {{helper skill} or {helping skill}} and {{client reaction} or {client statement}} などの検索語で 13 件収集した。計 19 件から Hill が関わっていない 7 件を参照した。カウンセラー訓練、ヘルパー訓練に関する文献についても検索し収集した。これらから逐語録データの分析方法の確認を行った。さらに、カリフォルニア大学サンディエゴ校コミュニケーション学部にて半年間 visiting scholar として滞在し、コミュニケーションやカウンセリング関係の教員に取材し情報収集を行った。Hill の訓練方法が、主要な方法であることを確認した。

(2) 過去の演習授業においては、Hill の 3 段階モデルにおけるカウンセリング初期の段階である探求段階の演習について初回と最終回の 2 回にわたってベースライン測定(ヘルパーによる手作業による逐語録作成、ヘルパーの言葉掛けについてヘルピング・スキルの特定、言葉掛けの時のヘルパーの意図、ヘルパーの評定する有益性評定、言葉掛けへのクライアントの評定する反応、クライアントの有益性評定)を行って紙媒体でレポートとして回収している。その両方も電子化し、経験豊富な者がレポート提出者のスキル特定が正しいかどうか点検を行い、レポート上の個人情報データ等をマスキングした。完成している資料について、すべて数値化されたデータに変換し、上記データを技術補助員および事務補佐員が、エクセルソフトを用いて、データの入力を行った。これらの手順で得られたデータの一部を統計ソフト SPSS に読み込んだ。

(3) Hill のヘルピング・スキル・システムを踏まえて、12 個のスキルのうち、探求段階の主要なスキルである是認と保証、開かれた質問、言い換え、感情の反映、自己開示、その他のスキルと、最終段階の行動段階のスキルである情報、直接的ガイダンスを取り上げ、以下の分析を行った。なお、データの電子化も引き続き行っているため、N 数は研究によって異なっている。

まず、スキルごとに有益性得点（0～9点）が異なるか、個人差（ペア差）を共変量とした一要因分散分析等統計的解析を行った。ヘルパーとクライアントの組によってヘルパーの言葉掛け回数が異なるが、その変動を排除した。その結果、是認と保証スキル、感情の反映スキルが他のスキルと比べて有益性が有意に高いことが確認された（Figure 1、日本心理学会第84回大会発表）。また、ヘルパーが言葉掛けした各スキルとクライアントの反応とをクロス集計表を作成し関係を検討した（発達心理学会32回大会発表）（Table

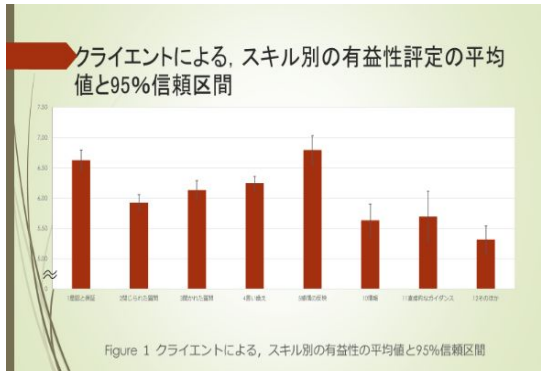


Table 1 各スキルとC1の反応のクロス表

	1 理解された	2 支持された	3 明確に言われた	4 信頼された	5 本音が伝わる	6 良い自己認識	7 明白	8 感情	9 責任性	10 開放	11 新しい視点	12 教えられた	13 新しい行動方法	14 挑戦された	15 脅かされた	16 強化された	17 理解された	18 方向づけられた	19 達成された	20 助言された	21 反応なし
1 是認と保証	260	256	59	36	12	37	29	45	6	6	22	12	3	3	4	0	1	5	11	14	20
2 閉じられた質問	205	236	27	21	28	94	92	43	5	4	88	16	14	23	9	3	17	28	46	31	45
3 開かれた質問	125	199	15	8	20	57	108	45	1	3	68	6	18	26	3	1	6	13	27	10	39
4 言い換え	100	102	28	60	40	87	17	128	12	13	48	16	6	13	2	3	9	15	25	22	46
5 感情の反映	100	100	2	14	15	13	30	30	3	1	10	2	1	2	1	0	0	1	0	3	4
10 情報	18	46	2	3	0	2	6	0	1	0	3	27	6	0	1	0	2	1	0	0	20
11 直接的ガイダンス	13	13	6	6	4	6	5	3	2	2	1	10	0	0	0	1	4	1	1	0	20
12 その他	45	102	145	57	177	301	273	22	29	150	60	43	45	7	2	15	31	54	33	122	

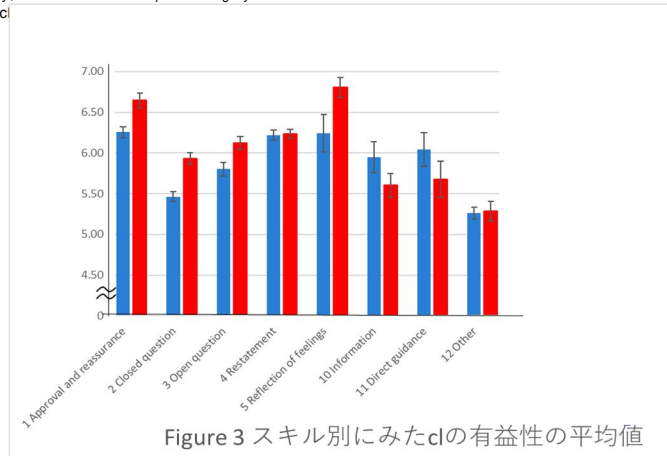
注) 反応は3つまで選択可能であった。1～14はポジティブな反応、15からネガティブな反応。上付き文字は、a)第1に多かった選択、b)第2に多かった選択、c)第3に多かった選択のものを示す。

Table 2 Contingency table of skill and intention

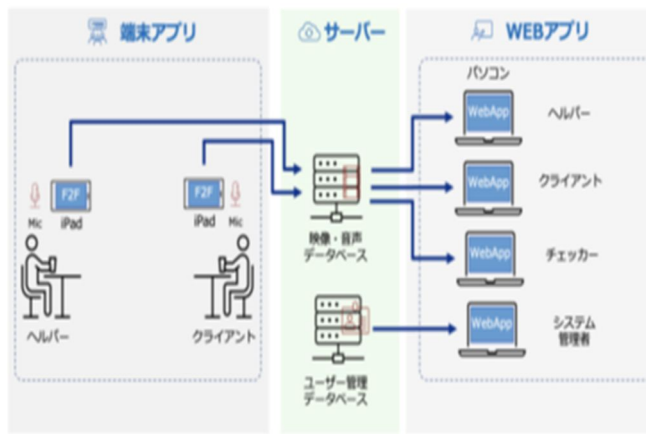
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	Usefulness Mean S.E.	
1 Approval and reassurance	6	12	2	33	26	51	73	52	1	1	6	67	26	21	15	1	8	7	6.622	0.086	
2 Closed question	1	3	8	149	124	182	46	25	15	11	18	68	112	30	8	3	24	3	8	5.925	0.067
3 Open question	9	24	10	66	100	123	24	29	9	5	10	45	139	32	7	3	16	1	2	6.131	0.079
4 Restatement	5	90	11	146	167	309	42	63	22	14	9	209	111	23	27	3	22	2	12	6.245	0.056
5 Reflection of feelings	2	11	3	104	29	61	4	27	2	1	1	11	26	7	3	1	4			6.789	0.120
10 Information	2	72	14	2	5	3	1					1	1	2			1	1		5.629	0.141
11 Direct guidance	1	20	4	1	1	3	1	1	1	1	3	5	9	2	1					5.692	0.212
12 Other	12	12	104	6	10	12	10				1	1	7	9	2	2	3	2	8	5.312	0.114

Intention list: 1 Set limits, 2 Get information, 3 Give information, 4 Support, 5 Focus, 6 Clarify, 7 Instill hope, 8 Encourage catharsis, 9 Identify maladaptive cognitions, 10 Identify maladaptive behaviors, 11 Encourage self-control, 12 Identify and intensify feelings, 13 Promote insight, 14 Promote change, 15 Reinforce change, 16 Deal with resistance, 17 Challenge, 18 Deal with the therapeutic relationship, 19 Relieve helper's needs  
a: The most frequent category, b: The second most frequent category, The third most frequent category  
The rightmost column shows the mean usefulness score and SE for each

1)。さらに、Prague で開催された ICP2020+では、スキルとヘルパーの意図の関係について発表した（Table 2）。発言回数の多いヘルパーとクライアントで有益性が異なるかも検討した。いずれも海外と同様の傾向を示していることが明らかにされた。ヘルピング・スキル訓練法を開発したHillは、主に質的研究法を得意としていることから、今回の統計的結果に基づく結論を得たことはこの領域における研究について展開ができたと言える。また、Figure 3 にあるように、訓練をすることにより、ヘルパーの訓練後（赤色）には訓練前（青色）と比べてヘルパーの発する各スキルについてクライアントが判断する有益性が増大することも示された（日本心理臨床学会第40回大会発表）。



(4)当初Linux OS を利用した訓練ツールの開発を計画していた。住友電気工業先端学術研究所からの委託研究および共同研究で開発したコミュニケーション分析ツールに改良を加えて、カウンセリング訓練システムの開発を行った。クライアントとヘルパーのそれぞれに録音機能及び録画機能を備えたタブレットを用意し、音声と画像をサーバー上に保存し、AI 解析し自動的に逐語作成することを可能にした。また、ヘルパーとクライアントが個別に意図、反応、有益性といった各評価、各スキルの特定についてもプルダウンで行える環境を整えた。特許登録が必要であるが本研究の大きな成果である。次年度開始の科研でシステムを発展させ、利用しやすい訓練ツールとして活用した研究の実施計画を立てている。



## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計12件（うち査読付論文 12件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Kakii Toshiaki; Fujii Hideyuki; Dai Guiming	4. 巻 8
2. 論文標題 Study of the characteristics of ear animations used to convey information and emotion in remote communication without web camera.	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Computers in Human Behavior Reports	6. 最初と最後の頁 1 - 15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.chbr.2022.100239	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -
1. 著者名 富島大樹 藤生英行	4. 巻 20
2. 論文標題 心配性者と非心配性者における注意バイアスのメタ分析	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 清泉女学院大学人間学部研究紀要	6. 最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 藤江 玲子; 藤生 英行	4. 巻 20
2. 論文標題 どのような生徒が高等学校のドロップアウトに至るのか? -タイプ分析を通じて-	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 松本大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 69-84
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 藤江 玲子; 藤生 英行	4. 巻 22
2. 論文標題 高等学校の転学者の特徴 学業面の適応・精神的健康・自尊感情・自己効力感に焦点を当てて	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 地域総合研究	6. 最初と最後の頁 81-95
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤江 玲子; 藤生 英行	4. 巻 19
2. 論文標題 高等学校の非卒業者の特徴に関する研究-担任へのインタビューをもとに-	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 松本大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 37-43
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤江玲子・ 藤生英行	4. 巻 21
2. 論文標題 等学校のドロップアウトの予防に関する研究動向の検討	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 地域総合研究	6. 最初と最後の頁 21-34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 藤江玲子	4. 巻 17
2. 論文標題 教職科目「教育相談」の実践-学校における「ヘルピング・スキル」の活用を目指して	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 松本大学教職センター教育実践改善シリーズ第17号第1分冊大学授業実践研究	6. 最初と最後の頁 1-29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 浦口真奈美; 藤生英行	4. 巻 52
2. 論文標題 養護教諭の職務上の悩みに対する養護教諭とそれ以外の教諭の認知の相異	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 教育相談研究	6. 最初と最後の頁 45 - 52
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高野 幸子; 富島 大樹; 藤生 英行	4. 巻 55
2. 論文標題 軽快退院した成人・高齢者が捉えた望ましい看護行動に関する質的研究	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 教育相談研究	6. 最初と最後の頁 29-34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮道 力; 藤生 英行	4. 巻 3
2. 論文標題 中学生のネガティブ感情に関連する学校ストレス感受性項目の収集と分類	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 岡山大学全学教育・学生支援機構教育研究紀要	6. 最初と最後の頁 17 - 30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 富島大樹; 末永清; 菅沼 憲治; 山口豊一; 藤生 英行	4. 巻 27
2. 論文標題 複数の心配関連刺激の処理における心配傾向の影響	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 パーソナリティ研究	6. 最初と最後の頁 140 - 148
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 沢崎 達夫; 小林 正幸; 新井 肇; 藤生英行; 平木 典子; 岩壁 茂; 小澤 康司; 山崎久美子	4. 巻 49
2. 論文標題 カウンセリング心理士の資格をめぐるー資格検討委員会報告ー	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 日本カウンセリング学会	6. 最初と最後の頁 108 - 122
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11544/cou.49.2_108	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計12件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 藤生英行
2. 発表標題 AIを用いたヘルピング・スキル訓練器具の開発ー心理臨床的援助訓練のAIによる支援に向けてー
3. 学会等名 日本心理臨床学会 第41回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 藤生英行 小川水菜子 福島唯実
2. 発表標題 コロナ時代に臨床発達心理士ができることを考える～アフターコロナ時代を見据えて～
3. 学会等名 臨床発達心理士会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 藤生英行 勝野美江 小川妙子 吉原寛 宮道力 藤江玲子
2. 発表標題 さまざまな職域での新しいカウンセリング支援
3. 学会等名 日本カウンセリング学会第54回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 藤生英行
2. 発表標題 日本におけるカウンセリング訓練の効果に関する研究 訓練前後のカウンセラーの発言回数とクライアントの有益性評価を用いて
3. 学会等名 日本心理臨床学会第40回大会
4. 発表年 2021年～2022年

1. 発表者名 藤生英行
2. 発表標題 クライアントによるカウンセリング・スキルの有益性評定得点の差の検討 カウンセラーの発言回数による差異に着目して
3. 学会等名 日本心理学会第85回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Nishikawa Mikiko; Fujiu Hideyuki; Fuji Kei
2. 発表標題 Dancing happily, thinking uniquely: An examination of the effect of online dance on creativity in working adults
3. 学会等名 INTERNATIONAL JOURNAL OF BEHAVIORAL MEDICINE (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Hideyuki Fujiu
2. 発表標題 Relationship between counseling skills, intention, and client's usefulness judgment in Japan.
3. 学会等名 The 32nd International Congress of Psychology (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 藤生英行
2. 発表標題 日本におけるカウンセリング・スキルと、CI.の反応との関係
3. 学会等名 日本発達心理学会第32回大会
4. 発表年 2021年



1. 発表者名 藤生英行・吉原寛・浦口真奈美・富島大樹・宮道力
2. 発表標題 カウンセリング・スキルは、ヒューマン・サービスの仕事で役立つだろうか？
3. 学会等名 日本心理学会第84回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 藤生英行
2. 発表標題 日本におけるカウンセリング・スキルの有益性についての予備的研究
3. 学会等名 日本心理学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 藤生英行
2. 発表標題 日本におけるカウンセリング・スキルと、CI.の反応との関係
3. 学会等名 日本発達心理学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 吉原寛・野口理英子・松原弘泰・宮道力・藤生英行
2. 発表標題 災害救援者でありながら被災者でもある教師のサポートについて考える
3. 学会等名 日本カウンセリング学会 第49回大会
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 藤生英行	4. 発行年 2016年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 208
3. 書名 <高校倫理の古典で学ぶ> 哲学トレーニング 「2-1-2 どんなにつらいときにも生きる意味を見いだせるのか-フランクル「夜と霧」」	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担 者	宮道 力  (Miyaji Chikara)  (20627822)	岡山大学・岡山大学東京オフィス・准教授    (15301)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------